

「リープフロッグ」という言葉が使われて久しい。いわゆる先進的な取り組みを、未導入の国や地域に対して導入し、従来の技術発展の道筋を飛び越えて、当該分野においていきなり最先端になることを意味する。例えば狩猟民族がスマホを駆使しながら狩りをする姿などは、

トシテイの文脈においてはもはやそれは過去の話と云ってよい。なぜならば、いわゆるDX（デジタルトランスフォーメーション）の下、規制緩和などで、徐々に市民に馴染む取り組みを

ゴス化されたと比較されるように、閉じた環境下で特殊な成長をしてしまった状況と比較すると、途上国はそのような閉じられた状況ではなく、食欲に新しいものを取り入れていく。加えて、日本では高度な規制の下、規制緩和などで、徐々に市民に馴染む取り組みを

リープフロッグ都市に学ぶ

賢い都市・地域戦略(4)

行為自体は伝統文化であるがそのうちの一部のみが、いきなり最先端といえる。リープフロッグのイメージは、途上国に対して持ちやすい。ところが、スマー

インターネットフェースとして多く用いられるスマホの普及やデータ通信網の充実度は国を問わず都市部では高水準だからだ。また、日本がよくガラパ

であるが、ダイナミックな変化に対応できないことや既得権益が幅を効かせた環境も多く、新規参入が容易ではないことも影響している。

対して、途上国では規制そのものがまだ策定されていないことや曖昧な判断基準であることも多く、新しい取り組みに対しては「まずはやってみよう」という勢いが非常に強いほか、行政側が民間企業に対して多くの取り組みに

も異なることでリープフロッグはもはや実現されつつあり、気がつけば日本は、まさしく井の中の蛙（リープできないフロッグ）であり、後にも先にも飛ぶことのできない硬直状態にある。

このような状況において、日本企業については、日本国内でのPoC（Proof of Concept）やビジネス概念実証、またはコンセプト実証）やビジネスモデルのみに執着するのではなく、たとえばASEAN（東南アジア諸国連合）などに注目してサービス展開を検討し、現地で成功した上で、華々しく逆輸入し、地域への最適化を踏まえて導入することが期待される。このために行政は地元企業に対し、海外での取り組みで成長・成功するよう支援を行い、リープフロッグ都市の実現事例に関与することが将来への投資になるという意識を持つべきだ。

（毎週木曜日に掲載）



宮田 将門（みやた まさと） 政策研究事業本部研究開発第2部（名古屋） 主任研究員

において協働を働きかけているところも大きい。単純に国や都市の財政が潤沢でないことも要因ではあるが、ビジネス環境を育てるという意識については途上国の方が得意といえるだろう。

以上のように、発展した時代背景や用いられる技術

